

被爆証言

六十七年目のガラス片

小湊 玲子

原爆についての私の体験はほかの方達の壮絶な体験とはちがひ、大変恵まれた状況の下にありまして、苦しみながら手当も受けずに亡くなられた方達のことを思いますと、とても皆様にお話するようなものではない、という思いがあり、今まで人様にお話することのなかったことでした。

併し今回、この場で証言に立つてほしいというお話をいただく二か月位前、ちよつとした出来事がありました。

それは、ある朝鏡を見ますと、右の肩の上に小さな切り傷が出来ており血がこびりついておりました。何かにぶつつかった覚えもなく不思議に思いました。そこは今まで小さなコブのようにふくれており、それまでは顔の切傷のあとが盛り上がっているものとはかり思っていたところでした。その時、以前手の甲から自然にガラスの破片が徐々に押し出されて出てきたのを思い出し、もしかして気がつき、さわってみますとコブが無くなり平らになっておりました。あの時入った二、三ミリの小さなガラスの粒が何かの刺激で動きだし、出てきたものと思われれます。

今、六十七年ぶりに初めて人様の前で被爆体験をお話することになった私と、同じく六十七年ぶりに姿を現わした小さなガラスの粒が私自身と重なって、全く偶然のことではありますが何か不思議なものを感じたことでもございました。

当時五年制だった女学校が私達の時から四年制になり、新しく看護婦の速成を目的とする看護組というクラスが設けられ、私はそのクラスに入っておりましたので、女学校を卒業すると、四月からすぐに広島市健康指導所というところに勤めはじめました。場所は大手町八丁目、大手町小学校の西にありました。爆心地から二二キロくらいのところでした。

当日はいつもの通り電車で出勤し、机の前にすわり、四、五人の同僚の方達と話をしていた時でした。

いきなりドーンという大きな音と衝撃を受け、一瞬何がおこったのかさっぱりわかりませんでした。屋内にいたせいか光は見えなかったと思います。気がついてみますと、丁度机の下にうずくまった姿勢になっており、こわれたもの、瓦礫のようなもの

で囲まれておりました。姿は見えませんでした。同僚の方達の声が聞こえ、又、前の方に六、七十センチの丸い穴がポツカリと開いており、外の明るい光が見えていた。皆さんと声をかけ合いながら瓦礫の中を這ってやっと外へ出ることが出来ました。

外は妙に明るく、広々としていて小学校もまわりの建物も何もありませんでした。

あの一瞬にして何もなくなってしまったあとの明るさ、広々とした空間、静けさ、実際には何か音があったのかもしれないが、心にしみ入るような異常な静けさが記憶に残っております。幸いにも同僚の方たちはあまり傷を受けておられないようでしたが、私は扉の厚いガラスの破片を右からまともに受けたらしく、痛みは全くありませんでしたが、顔や腕から生ぬるい血がダラダラと流れるのを感じ、初めて、ああ血というものはこんなに温かいものだと実感したのを覚えております。そのうち目のまわりからの出血で辺りが見えにくくなり、同僚の方に手をひかれ、こわれた建物の上を越えながら近くの市役所を目指して歩きました。しかし、もうすでに市役所の窓からは火が吹いておりました。

当時市役所の隣には緑色の木造の公会堂があり、庭には大きな広い池がありました。公会堂はすでにあとかたもなくなっておりましたが、とにかく火を避けるためには水の中に入ろうと、皆さんでかたまって池に入りました。すわって腰の辺りまで水があったように思います。ほかにも多くの人々が池に入っておられました。

そのうちどれくらいの時間がたったのかわかりませんが空が暗くなり、大粒の雨が叩きつけるように降ってきました。ほてった身体にはその雨がとても気持ちよく感じられ、またのどもかわいていたので、大きく口を開けて雨粒を飲みました。雨が少しでも長く降ってほしいと思ったことでした。あとで思えば放射能をたっぷり含んだ雨だったわけですが、今でも救われたような気持は覚えています。また私は、池の中で吐気におそわれ随分吐きました。吐く度に首のところの傷からひどく出血し、周りの方達には心配をかけたようです。

市役所の窓から吹き出す炎はますます勢いをますますばかりで、どうかこちらへ燃えうつることのないよう祈りながら池の水に浸っておりました。

その時、燃えさかる市役所の火を背景に男の人が石油缶を振り上げて池に投げ込もうとしているのが私達の目に入りました。きっとその人は石油缶の爆発をおそれて水に投げ入れようとしたのだと思います。その時一緒にいた私達のリーダーの方が大きな声で「止めなさい、そんなことをしたら皆のいる池の中に火が入る」と注意し、

止めて下さいました。

その人も普通の状態であれば、皆のいる池の中にそんな危険なものを投げ入れようとは思わなかったでしょうが、あの時は皆が皆パニックに落入っていたのだと思います。その人も注意されてハッと気がついたでしょう。石油缶を下ろしました。もし火が池に入っていたらどんなことになっていたかと思いません。

どれだけの時間、又、日が経ったのかわかりませんが、市役所の中の物も全て燃えつきたでしょう。火も消えたので水から上がり、池のそばで休みました。またそれからどれだけの時が過ぎたのか、市役所の建物の熱も冷め、中に入れるようになったので、また皆さんと市役所の中に入り、瓦礫の上で休みました。市役所の中は避難してこられた傷ついた方達でいっぱいでした。

時間の経過はわかりませんが、指導所の所長さんが私達を捜し当ててくださり、所長さんのお嬢さんが楽々園にいた家族に連絡してくださり、おじやいとこ達の迎えを受け、リヤカーに乗せられ、ほかの方達より一足先に家族のもとに帰ることができました。あとで聞いたことですが、おじ達はなかなか私が見つからず、一晚野宿して翌日やっと探し当ててくれたそうです。帰った時の私の状態は、血だらけで頭や顔、腕にはガラスがつきささり、目はつぶれていたようで、迎えてくれた家族に随分ショックを与えたようです。私自身としてはまぶたが腫れ、目を開けられないため、自分がどんな有様なのか全くわかりませんでした。かえってわからなかったのは幸せだったのかも知れません。

私が帰った時、天満町の自宅で足に大けがを負った母はすでに助けられ、楽々園の二階で寝ておりました。私も母と枕を並べ、医者であった父の手当てを受けました。父も傷を負っており苦しかったと思いますが、毎日ピンセットで傷口からガラスを一つ一つ取りのぞいてくれました。首のところの大きな傷からは一センチあまりのガラスの破片が毎日一つか二つずつ何日か続いて出てきました。父が多分頸動脈の後に入っているのが毎日出てくるのだらうと言っておりましたが、それを開きなんとなくぞっとしたのを覚えております。

母の傷の状態はよくなっていたのですが、原爆症の病状は日に日に悪くなり、八月二十六日に亡くなりました。

その夜父の実家から迎えにきてくれた荷馬車に、母の遺体と共に父、姉、めい、私も乗り、安佐郡の戸山村にありました父の本家に向かいました。翌日牧師先生に連絡

も出来ぬまま、父が司式をして母の葬儀を行いました。

その頃から私のなおりかけていた傷口から次々とまた出血し始め、歯ぐきやいろいろなところからも出血し、高熱が続くようになりました。何日くらい高熱が続いたのかわかりませんが、熱で頭が少しおかしくなっていたのだと思います。寝ていて、とにかく頭だけが真っ暗闇の中をグングングンと下へ下へと引き込まれてゆく感覚を覚えました。どこまで落ちて行くのか、これが奈落というものか、どこまで落ちれば底に着くのか、落ちて行く先は地獄なのか等々、いろいろ思っただけにいた父に、頭だけが下へ下へと落ちてゆくと話したら、父がこれを飲めばなおる、と言って薬をくれました。その薬が利いたのか間もなくその症状が消えました。あまりにもよく利いたように思ったので、後日、あの薬はどんな薬だったの、と父に聞きましたら、父がこともなげに「なに、胃薬よ」と言ったのには唖然としました。まさに病は氣から、鯛の頭も信心からだったのでしょうか。しかしあの時があちらとこちらの境目だったのではないか、と今でも思っています。それからは少しずつ快方に向かってゆきました。あれは十一月頃だったと思うのですが、それまでは身体をきれいにすることも出来ず、頭もあの時のままだったので、いとこが今日は髪を少しすいてあげようと言ってくれました。それでまず耳にかかっていた髪をかき上げてくれましたら、耳の中から小さなガラスの粒がポロポロと出てきました。そして次に髪に櫛を入れて動かしましたら、まるでかつらでも脱ぐようにガバツと髪全体がとれてしまいました。びっくりしましたが、下にはもう五ミリくらいの新しい髪の毛が生えていたのでホッとしました。それからは徐々に体力もつき、白血球の数億がもとにもどるのには一年以上かかりましたが、幸いにも健康をとりもどすことができました。

以上が私自身の体験ですが、今までいろいろな方の被爆体験記を読ませていただき、改めて、苦痛と不安の中、手当ても受けずに亡くなられた多くの方達のことを思いますと、今でも申し訳ない思いがしております。中でも私の心に強く残っておりますのは、建物疎開のあと片付けのための動労奉仕に動員された中学生、女学生達のことです。当時空爆による火事の類焼を防ぐため、ある区域の建物をあらかじめこわしておりました。そのあとかたづけに多くの中学生、女学生の低学年の人達が動員されました。みんな希望をもって入学した中学生達、まだ子供とっていいような十二、三歳の人達が、何の遮蔽物もないところで、まともに原爆の光を受け、傷ややけどを負い、どんなに心細く苦しかったことか、想像するさえ辛くなります。

私の女学校の後輩達も土橋あたりで作業開始の準備のため集まっていたところでした。全身に傷ややけどを負いながら己斐をめざして逃げたそうですが、己斐までいきつけなかった人が多く、結局二百二十三名の全員が亡くなりましたと聞いております。

他の学校の人達のこと加えますと本当に多くの若い命が失われました。また、たまたまその日に病気や何かの事情で作業を欠席したため生き残られた方達もそれぞれに心に重く深い傷をかかえながら生きていらしたようです。

年をとったせいか、若さということの大事さを身にしみて感じるこの頃ですが、それだけに多くの未来のある若い人達の命がこの原爆で、そして戦争で失われたことが残念でなりません。もう二度とこういふことのおこらない世界が続くように切に祈り、切に蘇っております。

・小湊玲子姉には宮城県から帰省をかねて被爆証言をして頂きました。